

同窓生 シリーズ

76



25 回生

篠原(森)厚子
しのはら あつこ

◆プロフィール

東京薬科大学 薬学博士
慶応義塾大学 薬学修士
順天堂大学 薬学修士
清教女子大学 薬学修士
野分専門女子大学 薬学修士
2007年 薬学博士
薬学専攻 薬学教授
健康化学

校歌はすっかり忘れてしまったが、「六中健児の歌」は今でもすぐに歌える。私は昭和45年の春、完成したばかりの前校舎で高校生活のスタートをきった。現校舎のある内藤町の敷地にはまだその前の旧校舎があった。1年D組の女子は12名、すぐに仲良くなり、特に最初に話したNさんとは40年以上たった今も親しくお付き合いしている。

中学時代から続けていたバドミントン部に入り、週3日は部活動。練習もフットワークも好きだったが、最後のランニングだけは嫌いで、仲間の背中と新宿御苑の塀を眺みながらへろへろと走った。帰りには新宿西口でNさんとソフトクリームかソバを食べた。戸山戦は、中学時代のクラブ仲間と再会する機会でもあり毎年楽しみであった。富士見高原の夏の合宿は、たくさんの先輩が来てくれて楽しかったが、体育館の暑さと、食事のまずさで、2、3kg体重を減らして帰京するのが常であった。

夏の館山は思い出深い。遠泳を無事に泳ぎ切り、夜には出し物やゲームに興じた。夕暮れの海に向かって友人たちとジョン・バエズの「We shall overcome」を歌ったことを鮮明に覚えている。少々肌が弱かった私は、最終日は日焼けで背中が水膨れとなり海に入ることが出来なかった。

2年、3年はクラス替えは無く、くそまじめからよくサボる連中までイロイロいたが、皆仲が良く、バレーボール好きが多かったのでよく男女混合で試合をした。大学受験も近くなった3年生の11月にクラス有志で箱根の芦ノ湖畔に出かけた。パンガローを借り、分担して持参した材料でカレーを作り、食べて、歌って、話して、翌日は湖畔を半日散歩して、15、6人参加したと記憶している。いま思えば、そんな時期によく行ったなあ、という感じだが、いまだにクラス会で「あの時は楽しかったなあ」という話が出る。「もう一度、あそこへ行こう」という話も頻繁に出るが、いまだ実行されていない。

卒業後、私は薬科大学に進んだ。「薬剤師になるう」と思ったのは小学生の時、級友の母親が薬剤師として働いていると知ったときだった。専業主婦が大半の時代であった

が、私は「自分で稼いで生活できる大人になる」と決めていたので「薬剤師になれば自立できる」とインプットされたのだ。幸い理科系の科目の方が得意だったので予定通り(今の進路となった。実際には、途中で研究が面白くなり、大学院に進学して、研究者の道歩くことになったので、薬剤師免許は持つていないが、薬剤師として働いたことは無い。大学院修了後、医学部の基礎の研究室で発がん物質の代謝、生体内微量元素や金属毒性に関する研究を続け、5年前からは文系の女子大で健康関連の授業と実験授業をしつつ、研究も続けている。結婚し、2人の子供に恵まれ、親兄弟や友人、ベビシッター、保育園など、多くの人に助けられながら、仕事を続けてこられたことは、大変幸せなことである。サポーターしてくれた人々へは、ただただ感謝しており、これからはサポーターする立場になろうと考えている。

高校時代は、将来のこと、自分の生き方のこと、友人との関係など、いろいろ悩みもあったが、今となると楽しかった思い出ばかりが心に残っている。今でも、同級生との付き合いは続いており、時々誘い合って飲みに行く仲間や、高校時代にほとんど交流は無かったがここ二十年くらい親しく付き合い合うようになった人たちもいる。かつて、同じ時と空間を共有していた親しみをベースに、違う分野の話や考えに触れて楽しんでる。小学校から大学まで、どの時代もそれなりに楽しく過ごしたと思うが、40年近く経過しても親しい友人が多い新宿高校時代の3年間は、私にとって青春の特別な時間であったのだと思う。

高校時代は自分がどう生きて行こうかという方向性が見え始める時期であり、暗中模索の時期でもあり、生涯の友を得て、自分というものに真剣に向き合う時期でもあると思う。その真っ只中にいる時を大切にしたいと思う。そして、卒業後も、あきらめず、卑下せず、自分のやりたいことを継続していつか欲しい。これを書いていたら、近代的な現校舎を訪問して、今の新宿高校に通う後輩たちに会いたくなった。